

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (172)

2026年1月の作品は

とうかいどうごじゅうさんつぎえきならびにい せ さんぐどうちゆう
「東海道五十三次驛 並 伊勢参宮道中」

—江戸時代の観光と出版文化—

展示テーマ

～伊勢参りから見る江戸時代の旅行と出版物～

江戸時代に一般大衆の間で伊勢神宮を参拝する、いわゆる伊勢参りが大流行したことは周知の事実である。誰もが一生に一度はと願ひ、庶民をにぎわせた伊勢参りは、ピーク時には国民の6人に1人が体験したとされ、特に60年に一度の「お陰参り」と呼ばれる集団参拝では、数百万規模の人々が伊勢を訪れた。このような流行の背景には、五街道をはじめとする交通環境の整備や、旅を啓発させる出版物の登場がある。旅行という文化が大いに発展し、大衆が参拝よりも観光を目当てとして各地を漫遊したことには、こういった書物や地図などが影響していると考えられる。また、江戸から伊勢までは当時は片道15日程度を所要し、当時の庶民にとっては一大イベントであったので、その長旅を支える旅の教訓書も多数存在し、旅行にかかる書物は非常に多岐にわたる。そこで、江戸時代に描かれた地図のうち、伊勢参りの案内を目的とされたものを見ながら、当時の旅行の文化や、それに関わる出版物に関して述べていきたい。



とうかいどうごじゅうさんつぎえきならびにい せ さんぐどうちゆう
「東海道五十三次驛 並 伊勢参宮道中」(1枚)

江戸時代末期

作者：岡田春燈齋(生没年不明)

縦10cm × 横16cm 枠：9cm × 15cm

上図は東海道五十三次と、伊勢神社参拝の道中図である。作者の岡田春燈齋は江戸時代末期の銅板画家で、弘化4(1847)年以降、諸国名所図や歴史絵などを多く制作し、水月屋という屋号の店を開いてそれらを販売した。この地図は、伊勢参拝のための案内であるのとらえることができる。図中には、東都日本橋、神都内神宮、皇都御内裏、仁都天保山の四か所の情景図と、品川から大津までの東海道の五十三の各駅、さらに東海道以外の近隣の駅名、駅と駅間の距離などが記載されている。一般的に、伊勢参りのルートは通常往路は東海道を使つてのものであったため、その案内であろう。また、単なる地図というよりは、後光の差す富士山の絵図や、小夜の中山などの名所として知られる地名が入れられていることから、見る人を楽しませようという工夫がうかがえる。

さて、前述の通り、江戸時代には一般大衆の間で伊勢参りが大流行した。それらを促す存在として、交通環境の整備に加え、旅を題材とした滑稽本や、旅行案内記などが数多く出版された。十返舎一九による『東海道中膝栗毛』(1802～1809年刊行)や、八隅蘆菴の『旅行用心集』(1810年刊行)などがそうで、この地図もまたその一部である。こういった名所記、名所案内記などをはじめとした情報文化の発達、大衆の旅行を促した側面がある。なお、英国の外交官アーネスト・サトウは、『一外交官の見た明治維新』(1979年刊行)の中で、次のように語っている。「日本人は大の旅行好きである。本屋の店頭には、宿屋、街道、道のり、渡船場、寺院、産物、そのほか旅行者の必要な事柄を細か

に書いた旅行案内の印刷物がたくさん置いてある」。旅行にかかる書物が人々を賑わせていたことが感じられる。

また、宝暦、天明期は、東日本からの伊勢参りの道中日記が急激に多く残り始める時期であった。それ以前の庶民の遠出は、ほとんどの場合、寺社仏閣を詣で、信仰のために行うものであったため、目的の場所を訪れた後は、来た道を引き返して帰路に就いた。しかし、伊勢参りにおいては、鎌倉、江の島、富士山など、様々な場所がルートに組み込まれていた。表向きは宗教行為である参拝を目的としつつも、寺社参拝が遊樂性を強め、観光としての旅行が一般的になっていたのである。複数の場所を訪れるため、それまでのように往復するのではなく、効率よく参拝地をめぐる知恵を絞るようになった。その知恵のひとつとして用いられたのがこのような案内図であろう。

こういった地図は人々にどう受け止められていたのか。春燈齋のこの地図は、縦10cm×横16cmと、非常に携帯しやすい大きさである。また、駅と駅の間には距離が記載されていることや、連なる山々や入り組んだ海岸の絵が載せられていることなど、視覚的に地形を把握しやすい工夫がある。旅に赴く人々にとって頼みの綱ともなろう。さらに、秋葉山、鳳来寺山など、伊勢参りに多く組み込まれていた名所も地図中書き添えられていることで、どこを参拝すればよいのかを規定し、見る人が旅の工程に見通しを立てやすくもできる。現代の我々が旅行に行こうと計画を立てるときに旅行誌を参考するように、当時の人々にとっても楽しく参考になる資料として認識されていたのではないだろうか。

展示のみどころ

～情景図のレイアウトと地理関係の一致～

東海道五十三次は、江戸方面から出発する場合、江戸の日本橋を最東端の出発点として、品川を一つ目の駅、大津を最後の駅とし、京都の三条大橋を終着点とするのが一般的である。この地図中にも品川から始まる五十三の駅が示されている。ところで、この地図には四隅に情景図が配置されている。右上の東都日本橋、左上の神都内神宮、右下の皇都御内裏、仁都天保山の四か所である。そのレイアウトを見ると面白いみどころが浮かび上がってくる。

右上に描かれる東都日本橋は、江戸時代初期の1603年に掛けられた橋で、歌川広重の浮世絵「東海道五十三次」にも描かれていることで有名である。前述の通り、東海道は日本橋を最東端としていて、品川の手前とされる。この作品を見ると、地図内の一番右上に品川駅があり、そのちょうど真横にある日本橋の情景図に向かって、品川駅の楕円から線が伸びている。品川から日本橋に線が繋がっているということ、品川のちょうど延長にある右上の位置に日本橋の情景図が配置されていることは偶然ではないはずである。

同じようにして、左上の皇都御内裏は、大津駅の続きの位置に配置されている。皇都御内裏は京都にあるので、やはり地理的に大津の地続きにある。左下の、大阪にある仁都天保山も同様である。右下の情景図は神都内神宮とあるが、「神都」は伊勢神宮のある三重県伊勢市を指すので、この絵は伊勢神宮を表していることがわかり、これもまた地理的に地図内の延長にあたる土地である。

このように、四隅の情景図は、地図内の四隅にある駅の延長上の土地であることがわかり、なんとなく名所の挿絵を入れているのではなく、地図内の駅の先に続く土地の情景を示しているのは、この地図の外側に広がる様子を



図1 「Google マップ」. <https://www.google.com/intl/ja/permissions/geoguidelines/> (最終閲覧日 2024/11/11)

感じる事ができ、非常に興味深い。また、日本地図と照らし合わせると、四か所の作品内のレイアウトが実際の位置関係と一致していることがわかる。

図1は日本地図の関東地方から近畿地方での範囲、情景図に示されている土地の位置を示したものである。図1において、1番は東都日本橋（東京都）、2番は神都内神宮（三重県）、3番は皇都御内裏（京都府）、4番は仁都天保山（大阪府）を示している。図1と、この地図を照らし合わせるとわかるように、春燈齋は実際の東西南北を意識しながら、地図内の駅の先にある土地の情景を示している。さらに言えば、この配置が実現できるよう、また本来の目的である案内としての役割を果たし、地図として破綻しないように計算したうえで、この作品は設計されているのだと考えると、春燈齋の手腕がうかがえるところである。

参考文献

- ・アーネスト・サトウ (1979). 『一外交官の見た明治維新』. 岩波書店.
- ・富山県公文書館 (2011). 『越中の旅人たち～江戸時代の寺社参拝～』. 富山県公文書館.
- ・原淳一郎 (2013). 『江戸の旅と出版文化』. 三弥井書店.
- ・山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所編 (2000). 『中世の山形と大江氏』. 山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所.

あとがき ～貴重資料に触れて～

貴重資料に触れるという得難い経験をさせていただき、大変学びの多い機会だった。今回調査した資料は、江戸時代の旅行にかかわるものだった。現代の私たちが旅行に行くときに持ち運びしやすい冊子などを片手に各地を遊樂するのと同じようにしていたと思うと、感慨深いものがある。当時は書店に多く旅行に関する書物が並んでいたということも踏まえると、彼らの旅は旅行誌を買い求めるところから始まっていたのかもしれない。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。また利用は学術研究目的に限らせていただいております。※過去の展示はオンラインでも公開中です！※第173回展示は令和8年2月上旬からを予定しています。



令和8年1月5日発行
令和6年度 日本文化論B受講生 編集
236-0027 横浜市金沢区瀬戸22-2
横浜市立大学 学術情報センター